

▽緋鹿子草紙(七卷)

帝キネ現代映畫

脚色並監督者 大森 勝氏
撮影者 岡本 静夫氏
主演者 里見 愛子氏
高津 愛子氏
藤間 林太郎氏
歌川 八重子嬢
二百七十七號

紹介

駄作の多い帝キネ映畫としては稀に見る好いものであつた。田中榮三氏が好んで書きさうな下町ものを帝キネ映畫で、此位感じを出せば上乗と云はねばならない。大森勝氏の脚色並監督は氏の好みのものとは云へ、近來の力作であつた。二人の下町娘にからむ戀の葛藤や銀吉夫婦の義理立てなどが殊によく描かれて居た。神田祭の情景やお蝶が静枝と清三郎の仲を初めて知る雨の日の出外事など優れた監督振りを認めて知れた。只隅田川がせせらぎであつたなどは一寸困つたが、帝キネ映畫ではそれまで云ふのは無理かも知れない。俳優も又總體よく下町情緒を出し、呉れた。藤間林太郎氏の銀吉と歌川八重子嬢のおつたなど全く役に成り切つて居た。高津愛子嬢の静枝も美しく且初々しく結構だつたが、此人の持味たる近代味が今度は返つて邪魔をして居る。松葉笑子嬢のお蝶は達者に演じて居る。後半では満場を完全に啜り泣かせて居た。里見明氏の清三郎は何んと云つても此人のもの。高津松葉と云ふ若いスターを相手にしても、少くも無理がない所が値打である。小島洋々氏の長谷川は清三郎を斬り付ける邊りで老練な演技を見せた。二條玉子嬢のお蘭や濱田格氏の養子幹雄なども適役であつた。技術方面も美しく上つて居た。(寫眞版紹介)寫眞説明に松葉笑子嬢小島洋々氏とあるは高津愛子嬢と濱田格氏の誤りに付訂正す。

山本 綠葉

興行價値——下町ものとしては、内容も俳優も揃つた逸品。下町ものを好む観客や婦人客には絶對に受ける。(十一月廿日 大阪芦逸劇場 神戶相生座 京都八千代館封切)